

映像制作に魂を注ぐヒトたち

映画人間

interview

【脚本分析家】

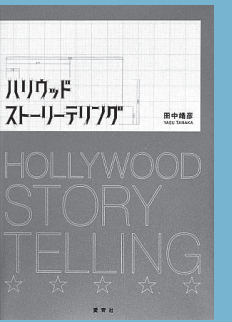
田中靖彦

YASUHIKO TANAKA

映画の脚本を数学的に分析して
より多くの観客に受け入れられるよう
再構成して改善する

田中氏の最新著書

ハリウッド ストーリーテリング



ハリウッド映画がなぜ面白いのか？ 綿密に計算されたスクリーンプレイ(脚本)の分析を通して、その秘密に迫る一冊。シド・フィールドが確立したハリウッド式シナリオメイキングの基本ロジックを徹底分析、約20年にわたる自らの体験を基にわかりやすく解説。2009年、愛育社刊。価格：2,415円

ハリウッド・ストーリーテリング脚本講習

5月に田中さんの講習が行われる。基礎1(5月14、15、16日)と基礎2(5月21、22、23日)で、受講料は各¥31,290(学生¥24,990)。基礎1・2連続受講者は¥59,850(学生¥47,250)。金曜日は19時、土日は10時30分スタート。会場はパシフィックボイス(東京都渋谷区千駄ヶ谷4-12-8 SSUビル Tel. 03-5474-8330)

詳細は<http://www.pacvoice.com/hs/>

「脚本分析家」という仕事は日本ではあまり耳慣れないが、映画の本場ハリウッドでは必要不可欠な存在。これで映画の完成度が飛躍的に変わるという。今回はLAに拠点を置いて活動する田中靖彦さんに脚本分析の仕事と、日本で開講する「ハリウッド・ストーリーテリング脚本講習」についてお話を聞いた。

——まず、「脚本分析家」とはどういうお仕事なのでしょう。

「数学的な観点から脚本の構成(プロット)を客観的に分析し、一人でも多くの観客に受け入れられやすい物語に改善するのが、脚本分析家(スクリーンライター)の仕事です。脚本のメデイカル・チェックをするという意味で、別名スクリーン・ドクターとも呼ばれます。大成したプロのライターですら「言いたいこと」が先に立ってしまい、客観的に何が起きたかを伝えるというストーリーテリング術の基本を怠ってしまうことがあります。そこで僕たちが必要になるわけです」

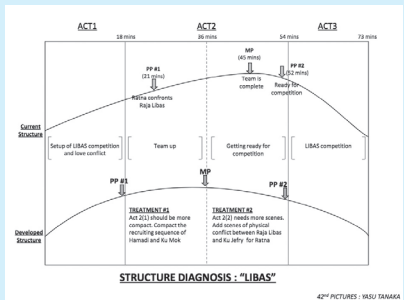
——映像業界を志した動機と、映画製作の中でもとりわけ脚本に関心を持った理由をお聞かせください。

「10歳の時にスピルバーグの『未知との遭遇』に魅せられ、いつしかハリウッドでの映画製作を夢見るようになりました。20歳の時に留学することに

なり、カリフォルニア州立大学の映画学科で映画製作を学びました。

在学中に製作した短編が複数のフィルム・フェスティバルで入賞して調子に乗った僕は、卒業制作で90分の長編映画の製作に挑戦しました。学生映画では30分でも長編の部類で、長い分内容が薄くなって失敗に終わりましたが、この時、人を引きつける映画作りのために脚本がいかに重要であるか身をもって知り、いい脚本を書くための自己探求が始まりました」

——そこから脚本の分析につながっていくわけですね。



講習の中で使用した分析グラフ。上が改善前、下が改善後。21分あったACT1を18分に短縮、ACT2後半のシーンを増やし、全体の構成を1:2:1の割合に。

「卒業後も独学で映画の分析を続け、僕は脚本の持つ、数学的な魅力にどんどん引き込まれていきました。『未知との遭遇』を見て感動した自分の心の動きが、これほど数学的に計算された脚本によってもたらさせていたなんて！と驚きの連続でした。やがて自分なりの分析法を構築し、それをハリウッドのプロダクションで実際に活用していきけるようになりました。当時僕は、インハウス・ライターという、主に持ち込まれた企画や脚本を限られた時間内に書き直したり改善する仕事をしていました。サブジェクト(題材)だけ与えられ、次の日までに10ページの粗筋を書くなんて仕事を毎日のようにこなしながら、僕は自分の分析法をさらに実践的なものにしていくことができました」

——「数学的に分析」とは具体的にどのようなことですか。

「ハリウッドの映画製作は徹底した分業制で、あらゆる部署のクルーたちが脚本という「設計図」に書かれた情報を頼りに働いています。ですから、

脚本は皆が理解できる共通の言語、ルールに則って書かれており、特に「1ページ1分のスクリーン・タイム」というルールが徹底しているため、ある程度数学的に扱えるようになっていきます。例えば、2時間の映画は120ページ程度であるべきで、特定のエピソードが50ページ目にかかるのか100ページ目にかかるのかで物語上の意味も変わってくる、といった具合です。また1960年代に、いかにしていい脚本、ヒットする脚本を書くか、徹底した分析が行われた結果、1...2...1の比率からなる3アクト構成をベースにしたようにシンプルな「基本フォーマット」が考案されました。現在もハリウッドはこの「基本フォーマット」に絶大な信頼を置いて物語を作り続けています」

——脚本の作り方も、日本とはシステムが違うようですね。

「ハリウッドでは、脚本をデベロップ(開発)するために多くの費用と時間をかけます。このデベロップメント・ステージの有無が日本との大きな違いです。日本の映画は、もう少し費用と時間をかけて脚本を開発すればもっと良くなるのに」という作品が多く、も

っといいと思わずにいられます。脚本の開発は物語の質を向上させるだけでなく、撮影日数など製作費全体の

削減にも繋がりますので」

——最後に、田中さんが講師を務める「ハリウッド・ストーリーテリング脚本講習」について教えてください。

「僕の講習では映像メディアの急速な変化に対応していくため、映像を使った講義に多くの時間を割きます。例えば、僕が所属するパシフィックボイスは国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア」を毎年開催していますが、今や(ワンセグテレビなど)小さな画面でも短編映画を観る時代なので、それに適した脚本術が必要ではないでしょうか。現在、世界各国で講習を行っていますが、新たな発見もあり、それぞれの文化背景や生活の違いを比較し、何が世界中の人々に受けるストーリーなのかを探求することは、この先とてもやりがいのある仕事だと思っています」

田中靖彦 たなか やすひこ

東京都出身。米カリフォルニア州立大学ノースリッジ校テレビ・フィルム学科卒業。さらにコロンビア・カレッジで映画プロダクションを学ぶ。ハリウッドの制作会社Sheen Production、Shower Productionなどでインハウス・ライターとして活動。現在、日米とアジア諸国で脚本技術の講習を実施、マレーシア政府機関FINASのもとでグローバル市場をターゲットとした脚本の開発にも携わる。フィギュア・スケートの元オリンピック強化選手で、04~05年にはディズニーのアイスショー「美女と野獣」の出演者として14カ国を回る。

【主な仕事】
「The Last Turtle Island」「Ice Show」「Transit」
「Seamless: Kidz Rule」「Fame on Ice」
ブログ <http://mmbn.blog73.fc2.com>